

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

A. コースワークの充実・強化

②分野横断的な科目群、副専攻科目群等の充実

●広島大学総合科学研究科総合科学専攻

「文理融合型リサーチマネージャー養成」の事例

(具体的に何を実施したのか)

- (1) 共通コア科目において、PBL (プロジェクト型学習) 授業・グループワーク・成果発表会を実施し、分野を横断して文理融合・総合科学研究について共通理解を深めた。
- (2) プロジェクト型教育を推進するために分野横断的に設置した「21世紀科学プロジェクト群」の教員が中心になって、PBL型教育を推進し、プロジェクト所属学生が中心になり、コア科目においてTA (ティーチング・アシスタント) としてグループワーク討論をリードした。
- (3) 「文系対象科学基礎実験」「研究倫理」「ICT (情報通信技術) リテラシー」「英語運用演習」「文書企画演習」などのリテラシー科目を新設し、分野を横断してプロジェクトマネジメントの知識向上・スキルアップにつながる講義を実施した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

- ・PBL型授業・グループワークの円滑な実施のため、教員、TA学生が事前に打ち合わせを十分行い、研修を行った。また、成果発表会は合宿形式で行い、議論・コミュニケーションが十分に行えるよう工夫した。
- ・リテラシー科目の実施に当たって、「文系対象科学基礎実験」「研究倫理」「ICTリテラシー」「英語運用演習」など、文系の学生・理系の学生いずれも参加できる内容とし、また、教員も文系・理系の教員が共同して立案・実施した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

コア科目は、従来複数教員によるオムニバス講義であったが、「講義間の関連がなく、総合科学的手法が身に付かない」等の批判があり、受講生アンケートの評価は低かった。しかし、PBL授業に転換することで、受講生アンケートの評価が上がった。発表会後のアンケートでも、多数の学生が「総合科学に関する理解を深めた」「文系と理系で問題解決の進め方が違うことが勉強になった」等肯定的意見を述べた。留学生に関しては、グループワークでの日本語討論に配慮し、討論が困難な場合には英語や中国語等で議論させるなど工夫した。これによって「日本語の討論能力が向上した」といった評価が増えた。